

# 復帰 49 年目の沖縄平和行進 核も戦争も基地も差別もない世界をめざして

沖縄平和運動センター 事務局長 岸本 喬

1972年5月15日、祖国日本への復帰を果たしました。それは28年間におよび自由と人権を蹂躪した米軍占領・米国支配の鉄鎖から解き放たれ、民が主権者であり、基本的人権が尊重され、なによりも軍隊と戦争を拒否する平和憲法の日本へ還ることができた喜びでした。

ところがです。すでに祖国日本は9条改憲論者が横行し、自衛隊という名の軍隊が増強の一途を辿っていました。そして復帰とともに自衛隊は沖縄にも配備され、49年を経た今日、本島・宮古・石垣・与那国に至るまで日米軍事一体化の下、米軍・自衛隊による軍事要塞化が進められています。民意や人権がないがしろにされ辺野古新基地が軟弱地盤・活断層で絶対的に建設不可能にもかかわらず1兆円もの国家予算と2030年代完成という無駄な歳月をかけ強行されています。

## 県民不在の普天間基地返還 日米合意から25年

1996年4月12日、当時の橋本首相とモンデール駐日大使が揃って「普天間基地を5年ないし7年以内に返還する」と発表しました。折しもその日、東京においては日比谷野音に5,000人を集め、憲法フォーラム（現平和フォーラム）と当平和センター共催による「沖縄とともに平和な21世紀をつくる4・12全国集会」、沖縄においては与儀公園に1万人を集め、当平和センター主催による「日米首脳会談にむけて普天間基地の返還等基地の整理縮小を求める県民大会」が開催されていました。

しかし喜びもつかの間、県内移設条件付きであることが明らかになりました。しかもそれは60年代に米国が予算上成立しなかったプランであり、開発中のオスプレイ配備を前提に、強襲揚陸艦が接岸でき、弾薬庫も有する統合基地建設の日米合意でした。しかも普天間基地と同様の2700m級滑走路を持つ代替飛行場をも要求されていることも明らかになっています。

どこまで米国従属で沖縄切り捨てなのでしょう。普天間基地の危険性は、四半世紀もほったらかし状態。2020年度は住民からの騒音などの苦情件数が759件、離発着回数も2月までの統計ですでに16,883回とともに過去最多となる現状です。その危険性が名護市辺野古に移されることであり、米軍機事故の80%は訓練中に沖縄のいたるところで起きていて、全県民のいのちの危険を伴う日米安保の負担は変わらないどころか増すばかりです。「最も危険な基地」という普天間基地の代名詞は、日

米が辺野古新基地を押し進めるための常套句にすぎず、本気で危険性除去に取り組んではいません。危険性の除去・負担軽減は、普天間基地を閉鎖することではできません。



2021年4月12日の普天間基地 オスプレイが居並ぶ。  
この空は私たちのもの

## コロナ禍の中で平和行進のバトンをつなぐ

2020年の平和行進はコロナ渦の中、43回目にして中止を余儀なくされました。今年も残念ながら県外や県内の参加を見送りました。加盟労組が感染の恐さを抱えながらも感染防止と感染の際の対応を話し合い、制限の中でも復帰の内実、憲法、安保を問いながら歩くことを決めました。5月の感染状況では厳しい判断も議論しました。

菅政権は、辺野古新基地の埋め立て土砂を未だ沖縄戦の遺骨が眠る本島南部から調達しようとしています。犠牲者や平和憲法への冒瀆以外何ものでもありません。戦跡からの土砂採取を何としても止め、辺野古新基地建設に終止符を打たなければなりません。私たちは、復帰49年目の平和行進を「沖縄戦終焉の地」と言われる南部を歩きます。県民大会では誓いを新たに、核も戦争も基地も差別もない世界をめざす宣言を行います。

復帰50年目の来年はぜひ県外、海外からも参加いただけるよう希望を託し、今回は平和センター加盟組織でバトンをつないでおきます。（きしもと たかし）



ワシントンから届いたメッセージボードを持って。  
4月6日の阻止行動